

(19)日本国特許庁(JP)

(12)特許公報(B2)

(11)特許番号

特許第7302876号

(P7302876)

(45)発行日 令和5年7月4日(2023.7.4)

(24)登録日 令和5年6月26日(2023.6.26)

(51)国際特許分類

F I

A 6 1 G 17/08 (2006.01)

A 6 1 G 17/08

Z

請求項の数 8 (全12頁)

(21)出願番号	特願2020-14362(P2020-14362)	(73)特許権者	520038242
(22)出願日	令和2年1月31日(2020.1.31)		石玉石材株式会社
(65)公開番号	特開2021-119934(P2021-119934 A)		愛知県春日井市大泉寺町大池下4 4 3 番 地 1 2 5
(43)公開日	令和3年8月19日(2021.8.19)	(74)代理人	100181582
審査請求日	令和4年10月25日(2022.10.25)		弁理士 和田 直斗
		(72)発明者	花田 教貴
			愛知県春日井市大泉寺町大池下4 4 3 番 地 1 2 5 石玉石材株式会社内
		審査官	松江 雅人

最終頁に続く

(54)【発明の名称】 納骨袋

(57)【特許請求の範囲】

【請求項 1】

遺骨を収容し、納骨場所に少なくとも一部が土に接する状態で所定の期間納められ、前記所定の期間経過後に前記納骨場所から取り出すための納骨袋であって、

遺骨を収容する袋状の遺骨収容袋部を備え、

前記遺骨収容袋部は、シリカ繊維により構成されている、納骨袋。

【請求項 2】

前記遺骨収容袋部には、前記遺骨収容袋部の内面の少なくとも一部を被覆する内面被覆部が設けられている、請求項 1 に記載の納骨袋。

【請求項 3】

前記内面被覆部は、シリカマットにより構成されている、請求項 2 に記載の納骨袋。

【請求項 4】

遺骨を収容し、納骨堂の納骨場所に所定の期間納めるための納骨袋であって、

遺骨を収容する袋状の遺骨収容袋部を備え、

前記遺骨収容袋部は、シリカ繊維により構成されている、納骨袋。

【請求項 5】

前記遺骨収容袋部は、自立可能に構成されている、請求項 4 に記載の納骨袋。

【請求項 6】

前記遺骨収容袋部は、遺骨を収容する骨壺を収容可能に構成されている、請求項 4 又は 5 に記載の納骨袋。

10

20

【請求項 7】

前記遺骨収容袋部には、前記遺骨収容袋部の内面の少なくとも一部を被覆する内面被覆部が設けられている、請求項 4 ～ 6 のいずれか 1 項に記載の納骨袋。

【請求項 8】

前記内面被覆部は、シリカマットにより構成されている、請求項 7 に記載の納骨袋。

【発明の詳細な説明】**【技術分野】****【0001】**

本発明は、納骨袋に関する。

【背景技術】

10

【0002】

一般的に、お墓に納骨する場合、遺骨をカロート（納骨室）と呼ばれる納骨場所に納める。カロートの構造は、遺骨を自然の土に返すという考え方から、底がそのまま土になっているものがある。この場合、遺骨を骨壺から取り出し、そのまま散骨せずに、生分解性を有する布や袋に包んでカロート内に納める。例えば、特許文献 1 には、生分解性材料を用いた遺骨収納容器が開示されている。

【先行技術文献】**【特許文献】****【0003】**

【文献】特願 2012 - 245368 号公報

20

【発明の概要】**【発明が解決しようとする課題】****【0004】**

近年、都市部への人口集中、少子高齢化、ライフスタイルの多様化等により、お墓参りをしてくれる人がいない、お墓参りに行くことができない人が増えているといった事情がある。そのため、従来の永代使用（永代使用料を払ってお墓の権利を取得し、その土地を永代にわたって使用すること）に代わって、寺院や霊園が管理や供養をする永代供養（寺院や霊園が遺骨を預かり、永代にわたって供養すること）の需要が高まっている。

【0005】

永代供養の場合、遺骨の安置期間には一定の期限（例えば、三十三回忌や五十回忌まで）が設けられているため、所定の期間経過後、お墓や納骨堂から遺骨を取り出して合祀墓に移したり、遺族が引き取ったりする必要がある。また、遺族の意向等により期間の途中で改葬（既にあるお墓等から別のお墓等に遺骨を移すこと）する場合には、お墓等から遺骨を取り出して別のお墓等に移動する必要がある。

30

【0006】

よって、永代供養のように、お墓等に遺骨を納めて所定の期間が経過した後に、お墓等から遺骨を取り出す機会や可能性が増えている。ところが、従来、遺骨を自然の土に返すという考え方から、遺骨を生分解性の布や袋に包んでいるため、納骨してから所定の期間が経過した後に遺骨だけを取り出すことは容易ではなかった。

【0007】

40

本発明は、新規の様々な用途に適用することができる納骨袋を提供する。

【課題を解決するための手段】**【0008】**

本発明の一の態様である納骨袋は、遺骨を収容し、納骨場所に少なくとも一部が土に接する状態で所定の期間納められ、所定の期間経過後に納骨場所から取り出すための納骨袋である。納骨袋は、遺骨を収容する袋状の遺骨収容袋部を備えている。遺骨収容袋部は、シリカ繊維により構成されている。

【0009】

上記納骨袋によれば、遺骨収容袋部は、土に含まれる砂や粘土の主成分であるシリカ（ SiO_2 ）からなり、耐腐食性、耐候性に優れたシリカ繊維により構成されている。そのた

50

め、納骨袋を納骨場所（例えば、お墓のカロート（納骨室）等）に少なくとも一部が土に接する状態で長期間納めた後であっても、遺骨を収容した遺骨収容袋部の腐食や経年劣化を抑制できる。すなわち、遺骨を納骨袋に収容した状態で長期間にわたって十分に保護できる。

【0010】

これにより、遺骨を収容した納骨袋を所定の期間経過後（例えば、三十三回忌や五十回忌を終えた後、改葬する時等）に納骨場所から取り出すことが容易となる。すなわち、納骨場所に納骨してから長期間経過後であっても、遺族にとって大切な故人の遺骨を容易かつ確実に取り出すことができる。よって、納骨場所から遺骨を取り出して合祀墓に移したり、遺族が引き取ったり、改葬したりする作業が容易となる。

10

【0011】

また、納骨袋の遺骨収容袋部を構成するシリカ繊維は、上述したとおり、土に含まれる砂や粘土の主成分であるシリカからなる。そのため、土とほぼ同様の成分からなるシリカ繊維により構成された遺骨収容袋部に遺骨を収容し、少なくとも一部が土に接する状態で納骨袋を納骨場所に納めることにより、故人の遺骨を自然の土に返すという意味や思いを込めることができる。

【0012】

上記納骨袋において、遺骨収容袋部には、遺骨収容袋部の内面の少なくとも一部を被覆する内面被覆部が設けられていてもよい。この場合には、遺骨収容袋部と内面被覆部との二重構造により、収容した遺骨によって遺骨収容袋が損傷したり、特に尖った部分を有する骨が遺骨収容袋を貫通して外部に飛び出したりすることを抑制できる。これにより、納骨袋及びその納骨袋に収容した遺骨を十分に保護できる。

20

【0013】

また、内面被覆部は、シリカマットにより構成されていてもよい。この場合には、耐腐食性、耐候性に優れたシリカマットにより、遺骨を納骨袋に収容した状態で長期間に渡って保護するという効果をさらに高めることができる。また、柔軟性を有するシリカマットで遺骨を包み込むことにより、故人に安らかに眠ってほしいという遺族の故人に対する思いを込めることができる。

【0014】

本発明の他の態様である納骨袋は、遺骨を収容し、納骨堂の納骨場所に所定の期間納めるための納骨袋である。納骨袋は、遺骨を収容する袋状の遺骨収容袋部を備えている。遺骨収容袋部は、シリカ繊維により構成されている。

30

【0015】

従来、納骨堂に納骨する際には、骨壺に遺骨を収容してロッカー式、仏壇式、棚式、墓石式等の各種形式の納骨堂の納骨場所に納める。しかしながら、例えば地震や火災等が起きて納骨堂が倒壊した場合、陶磁器等からなる骨壺が割れて中に入っていた遺骨が外に出てしまい、誰の遺骨かわからなくなったり、他の遺骨が混ざったりする可能性があるという問題があった。

【0016】

上記納骨袋によれば、耐熱性に優れたシリカ繊維により構成された遺骨収容袋部に遺骨を収容する。そのため、遺骨を収容した納骨袋を納骨堂に納めている間に例えば地震や火災等が起きて納骨堂が倒壊した場合であっても、割れてしまう可能性があった従来の骨壺とは異なり、遺骨を納骨袋に収容した状態で十分に保護することができる。また、火災等に対しても、耐熱性を有する納骨袋によって遺骨を十分に保護することができる。これにより、上述したような災害時における従来の問題点を解消することができる。

40

【0017】

また、遺骨収容袋部は、耐候性に優れたシリカ繊維により構成されている。そのため、遺骨を収容した納骨袋を所定の期間経過後（例えば、三十三回忌や五十回忌を終えた後、改葬する時等）に納骨堂から取り出すことが容易となる。すなわち、納骨堂に納骨してから長期間経過後であっても、遺族にとって大切な故人の遺骨を容易かつ確実に取り出すこ

50

とができる。これにより、納骨堂から遺骨を取り出して合祀墓に移したり、遺族が引き取ったり、改葬したりする作業が容易となる。

【 0 0 1 8 】

また、納骨袋の遺骨収容袋部を構成するシリカ繊維は、土に含まれる砂や粘土の主成分であるシリカ (SiO_2) からなる。そのため、土とほぼ同様の成分からなるシリカ繊維により構成された遺骨収容袋部に遺骨を収容し、納骨袋を納骨堂に納めることにより、故人の遺骨を自然の土に返すという意味や思いを込めることができる。

【 0 0 1 9 】

上記納骨袋において、遺骨収容袋部は、自立可能に構成されていてもよい。この場合には、納骨袋の遺骨収容袋部に収容した遺骨を納骨堂の納骨場所に安置することが容易となる。また、納骨堂の納骨場所から遺骨を取り出す作業も容易となる。

10

【 0 0 2 0 】

また、遺骨収容袋部は、遺骨を収容する骨壺を収容可能に構成されていてもよい。この場合には、例えば地震や火災等が起きて納骨堂が倒壊しても、納骨袋によって衝撃を吸収し、骨壺が割れることを抑制できる。また、骨壺が万が一割れたとしても、遺骨を納骨袋に収容した状態で十分に保護することができる。

【 0 0 2 1 】

また、遺骨収容袋部には、遺骨収容袋部の内面の少なくとも一部を被覆する内面被覆部が設けられていてもよい。この場合には、遺骨収容袋部と内面被覆部との二重構造により、収容した遺骨によって遺骨収容袋が損傷したり、特に尖った部分を有する骨が遺骨収容袋を貫通して外部に飛び出したりすることを抑制できる。これにより、納骨袋及びその納骨袋に収容した遺骨を十分に保護できる。

20

【 0 0 2 2 】

また、内面被覆部は、シリカマットにより構成されていてもよい。この場合には、衝撃吸収性、耐熱性に優れたシリカマットにより、災害時における納骨堂の倒壊や火災に対して遺骨を納骨袋によって保護するという効果をさらに高めることができる。特に、遺骨収容袋部に骨壺を収容する場合には、骨壺の割れをより一層抑制できる。また、柔軟性があるシリカマットで遺骨を包み込むことにより、故人に安らかに眠ってほしいという遺族の故人に対する思いを上記納骨袋に込めることができる。

【 図面の簡単な説明 】

30

【 0 0 2 3 】

【 図 1 】 第 1 実施形態の納骨袋を示す説明図である。

【 図 2 】 第 1 実施形態の納骨袋を示す説明図である。

【 図 3 】 第 1 実施形態の納骨袋の使用例を示す説明図である。

【 図 4 】 第 2 実施形態の納骨袋を示す説明図である。

【 図 5 】 第 2 実施形態の納骨袋を示す説明図である。

【 図 6 】 第 3 実施形態の納骨袋を示す説明図である。

【 図 7 】 第 3 実施形態の納骨袋を示す説明図である。

【 図 8 】 第 3 実施形態の納骨袋の使用例を示す説明図である。

【 図 9 】 第 4 実施形態の納骨袋を示す説明図である。

40

【 発明を実施するための形態 】

【 0 0 2 4 】

以下、本発明の実施形態を図面と共に説明する。

(第 1 実施形態)

本実施形態の納骨袋の一例について説明する。

図 1、図 2 に示すように、納骨袋 1 は、遺骨を収容する袋状の遺骨収容袋部 11 を備えている。遺骨収容袋部 11 は、略長形状を呈している。遺骨収容袋部 11 は、長手方向の一端に開口部 12 を有する。遺骨収容袋部 11 は、長手方向の他端が閉じられている。

【 0 0 2 5 】

遺骨収容袋部 11 の一方 (開口部 12 側) の端部 111 には、2本の紐部 13 が取り付け

50

けられている。遺骨収容袋部 11 の開口部 12 は、2 本の紐部 13 によって縛ることができる。2 本の紐部 13 には、収容した遺骨が誰のものであるかを示すための故人の名前等が記載された名札等を取り付けることができる。

【0026】

遺骨収容袋部 11 は、シリカ繊維により構成されている。シリカ繊維は、シリカ (SiO_2) を主成分とする繊維である。遺骨収容袋部 11 は、1 枚のシリカ繊維のカット片を縫製してなる。本実施形態において、シリカ繊維としては、株式会社光和製のシリカクロス (品番: KSC600、厚み: 0.53 mm、重さ: 610 g/m²、朱子織り) を用いている。

【0027】

次に、本実施形態の納骨袋の使用例について説明する。

図 3 に示すように、お墓 10 には、カロート (納骨室) 101 が設けられている。カロート 101 は、石やコンクリートで囲まれた内部空間を有する納骨場所であり、地面よりも下 (地中) に設けられている。なお、カロート 101 は、地面よりも上 (地上) に設けられていてもよい。カロートの底は、土 102 が露出した状態となっている。

【0028】

カロート 101 内には、遺骨を収容した納骨袋 1 が納められている。納骨袋 1 は、カロート 101 の底に露出した土 102 の上に納められている。すなわち、納骨袋 1 は、その少なくとも一部 (遺骨収容袋部 11 の少なくとも一部) がカロート 101 の底に露出した土 102 に接する状態で納められている。

【0029】

納骨袋 1 は、永代供養の場合、お墓 10 のカロート 101 内に所定の期間納められる。所定の期間とは、例えば、三十三回忌や五十回忌を終えるまでの期間である。所定の期間が経過した後は、お墓 10 のカロート 101 内から納骨袋 1 を取り出し、合祀墓に移したり、遺族が引き取ったりする。また、所定の期間が経過する途中で、改葬するために納骨袋 1 を取り出すこともある。

【0030】

次に、本実施形態の納骨袋 1 における作用効果について説明する。

本実施形態の納骨袋 1 によれば、遺骨収容袋部 11 は、土に含まれる砂や粘土の主成分であるシリカ (SiO_2) からなり、耐腐食性、耐候性に優れたシリカ繊維により構成されている。そのため、納骨袋 1 を納骨場所 (例えば、お墓 10 のカロート (納骨室) 101 等) に少なくとも一部が土 102 に接する状態で長期間納めた後であっても、遺骨を収容した遺骨収容袋部 11 の腐食や経年劣化を抑制できる。すなわち、遺骨を納骨袋 1 に収容した状態で長期間に渡って十分に保護できる。

【0031】

これにより、遺骨を収容した納骨袋 1 を所定の期間経過後 (例えば、三十三回忌や五十回忌を終えた後、改葬する時等) に納骨場所から取り出すことが容易となる。すなわち、納骨場所に納骨してから長期間経過後であっても、遺族にとって大切な故人の遺骨を容易かつ確実に取り出すことができる。よって、納骨場所から遺骨を取り出して合祀墓に移したり、遺族が引き取ったり、改葬したりする作業が容易となる。

【0032】

また、納骨袋 1 の遺骨収容袋部 11 を構成するシリカ繊維は、上述したとおり、土に含まれる砂や粘土の主成分であるシリカからなる。そのため、土とほぼ同様の成分からなるシリカ繊維により構成された遺骨収容袋部 11 に遺骨を収容し、少なくとも一部が土 102 に接する状態で納骨袋 1 を納骨場所 (例えば、お墓 10 のカロート 101 等) に納めることにより、故人の遺骨を自然の土に返すという意味や思いを込めることができる。

【0033】

(第 2 実施形態)

本実施形態は、図 4、図 5 に示すように、納骨袋 1 の構成を変更した例である。なお、第 1 実施形態と同様の構成及び作用効果については説明を省略する。

10

20

30

40

50

【 0 0 3 4 】

図 4、図 5 に示すように、遺骨収容袋部 1 1 には、遺骨収容袋部 1 1 の内面 1 4 の一部を被覆する内面被覆部 1 5 が設けられている。内面被覆部 1 5 は、遺骨収容袋部 1 1 の内面 1 4 において、遺骨収容袋部 1 1 の一方（開口部 1 2 側）の端部 1 1 1 を除いた部分に設けられている。

【 0 0 3 5 】

内面被覆部 1 5 は、シリカマットにより構成されている。シリカマットは、シリカ（ SiO_2 ）を主成分とするシリカ繊維をマット状にしたものである。内面被覆部 1 5 は、遺骨収容袋部 1 1 の内面 1 4 に縫い付けられている。本実施形態において、シリカマットとしては、株式会社光和製のシリカニードルマット（品番：K S M 1 6 0 0 - 1 0、厚み：1 0 mm、密度：1 6 0 0 g / m^3 ）を用いている。シリカニードルマットは、シリカチョップドファイバーをニードルパンチでマット状にしたものである。

10

【 0 0 3 6 】

本実施形態の納骨袋 1 によれば、遺骨収容袋部 1 1 には、遺骨収容袋部 1 1 の内面 1 4 の一部を被覆する内面被覆部 1 5（シリカマット）が設けられている。そのため、遺骨収容袋部 1 1 と内面被覆部 1 5 との二重構造により、収容した遺骨によって遺骨収容袋部 1 1 が損傷したり、特に尖った部分を有する骨が遺骨収容袋部 1 1 を貫通して外部に飛び出したりすることを抑制できる。これにより、納骨袋 1 及びその納骨袋 1 に収容した遺骨を十分に保護できる。

【 0 0 3 7 】

また、内面被覆部 1 5 は、シリカマットにより構成されている。そのため、耐腐食性、耐候性に優れたシリカマットで構成された内面被覆部 1 5 により、遺骨を納骨袋 1 に収容した状態で長期間に渡って保護するという効果をさらに高めることができる。また、柔軟性を有するシリカマットで構成された内面被覆部 1 5 で遺骨を包み込むことにより、故人に安らかに眠ってほしいという遺族の故人に対する思いを込めることができる。

20

【 0 0 3 8 】

（第 3 実施形態）

本実施形態の納骨袋の一例について説明する。

図 6、図 7 に示すように、納骨袋 2 は、遺骨を収容する袋状の遺骨収容袋部 2 1 を備えている。遺骨収容袋部 2 1 は、円形状の底部 2 2 と円筒状の側面部 2 3 とを有する。遺骨収容袋部 2 1 は、側面部 2 3 の軸方向の一端に開口部 2 4 を有する。遺骨収容袋部 2 1 は、側面部 2 3 の軸方向の他端が底部 2 2 によって閉じられている。遺骨収容袋部 2 1 は、自立可能に構成されている。

30

【 0 0 3 9 】

遺骨収容袋部 2 1 の側面部 2 3 の一方（開口部 2 4 側）の端部 2 3 1 には、2 本の紐部 2 5 が取り付けられている。遺骨収容袋部 2 1 の開口部 2 4 は、2 本の紐部 2 5 によって縛ることができる。2 本の紐部 2 5 には、収容した遺骨が誰のものであるかを示すための故人の名前等が記載された名札等を取り付けることができる。

【 0 0 4 0 】

遺骨収容袋部 2 1 は、シリカ繊維により構成されている。シリカ繊維は、シリカ（ SiO_2 ）を主成分とする繊維である。遺骨収容袋部 2 1 は、シリカ繊維により構成された底部 2 2 と側面部 2 3 とを縫製してなる。また、側面部 2 3 は、1 枚のシリカ繊維のカット片を縫製してなる。本実施形態において、シリカ繊維としては、株式会社光和製のシリカクロス（品番：K S C 6 0 0、厚み：0 . 5 3 mm、重さ：6 1 0 g / m^2 、朱子織り）を用いている。

40

【 0 0 4 1 】

また、遺骨収容袋部 2 1 には、遺骨収容袋部 2 1（底部 2 2、側面部 2 3）の内面 2 6 の一部を被覆する内面被覆部 2 7 が設けられている。内面被覆部 2 7 は、遺骨収容袋部 2 1（底部 2 2、側面部 2 3）の内面 2 6 において、側面部 2 3 の一方（開口部 2 4 側）の端部 2 3 1 を除いた部分に設けられている。

50

【 0 0 4 2 】

内面被覆部 2 7 は、シリカマットにより構成されている。シリカマットは、シリカ（ SiO_2 ）を主成分とするシリカ繊維をマット状にしたものである。内面被覆部 2 7 は、遺骨収容袋部 2 1（底面部 2 2、側面部 2 3）の内面 2 6 に縫い付けられている。本実施形態において、シリカマットとしては、株式会社光和製のシリカニードルマット（品番：K S M 1 6 0 0 - 1 0、厚み：1 0 mm、密度：1 6 0 0 g / m³）を用いている。

【 0 0 4 3 】

次に、本実施形態の納骨袋の使用例について説明する。

図 8 に示すように、納骨堂には、ロッカー式の納骨壇 2 0 が設けられている。納骨壇 2 0 には、区分けされた複数の納骨棚（納骨場所）2 0 1 が設けられている。各納骨棚 2 0 1 には、扉 2 0 2 が付いている。納骨棚 2 0 1 には、遺骨を収容した納骨袋 2 が納められている。納骨袋 2 は、納骨棚 2 0 1 に自立した状態で納められている。

10

【 0 0 4 4 】

納骨袋 2 は、例えば永代供養の場合、納骨堂の納骨壇 2 0 の納骨棚 2 0 1 に所定の期間納められる。所定の期間とは、例えば、三十三回忌や五十回忌を終えるまでの期間である。所定の期間が経過した後は、納骨堂の納骨壇 2 0 の納骨棚 2 0 1 から納骨袋 2 を取り出し、合祀墓に移したり、遺族が引き取ったりする。また、所定の期間が経過する途中で、改葬するために納骨袋 2 を取り出すこともある。

【 0 0 4 5 】

次に、本実施形態の納骨袋 2 における作用効果について説明する。

20

本実施形態の納骨袋 2 によれば、耐熱性に優れたシリカ繊維により構成された遺骨収容袋部 2 1 に遺骨を収容する。そのため、遺骨を収容した納骨袋 2 を納骨堂に納めている間に例えば地震や火災等が起きて納骨堂が倒壊した場合であっても、割れてしまう可能性があった従来の骨壺とは異なり、遺骨を納骨袋 2 に収容した状態で十分に保護することができる。また、火災等に対しても、耐熱性を有する納骨袋 2 によって遺骨を十分に保護することができる。これにより、上述したような災害時における従来の問題点を解消することができる。

【 0 0 4 6 】

また、遺骨収容袋部 2 1 は、耐候性に優れたシリカ繊維により構成されている。そのため、遺骨を収容した納骨袋 2 を所定の期間経過後（例えば、三十三回忌や五十回忌を終えた後、改葬する時等）に納骨堂から取り出すことが容易となる。すなわち、納骨堂に納骨してから長期間経過後であっても、遺族にとって大切な故人の遺骨を容易かつ確実に取り出すことができる。これにより、納骨堂から遺骨を取り出して合祀墓に移したり、遺族が引き取ったり、改葬したりする作業が容易となる。

30

【 0 0 4 7 】

また、納骨袋 2 の遺骨収容袋部 2 1 を構成するシリカ繊維は、土に含まれる砂や粘土の主成分であるシリカ（ SiO_2 ）からなる。そのため、土とほぼ同様の成分からなるシリカ繊維により構成された遺骨収容袋部 2 1 に遺骨を収容し、納骨袋 2 を納骨堂に納めることにより、故人の遺骨を自然の土に返すという意味や思いを込めることができる。

【 0 0 4 8 】

40

また、本実施形態の納骨袋 2 において、遺骨収容袋部 2 1 は、自立可能に構成されている。そのため、納骨袋 2 の遺骨収容袋部 2 1 に収容した遺骨を納骨堂の納骨場所に安置することが容易となる。また、納骨堂の納骨場所から遺骨を取り出す作業も容易となる。

【 0 0 4 9 】

また、遺骨収容袋部 2 1 には、遺骨収容袋部 2 1（底面部 2 2、側面部 2 3）の内面 2 6 の一部を被覆する内面被覆部 2 7（シリカマット）が設けられている。そのため、遺骨収容袋部 2 1 と内面被覆部 2 7 との二重構造により、収容した遺骨によって遺骨収容袋部 2 1 が損傷したり、特に尖った部分を有する骨が遺骨収容袋部 2 1 を貫通して外部に飛び出したりすることを抑制できる。これにより、納骨袋 2 及びその納骨袋 2 に収容した遺骨を十分に保護できる。

50

【 0 0 5 0 】

また、内面被覆部 2 7 は、シリカマットにより構成されている。そのため、耐腐食性、耐候性に優れたシリカマットで構成された内面被覆部 2 7 により、遺骨を納骨袋 2 に収容した状態で長期間に渡って保護するという効果をさらに高めることができる。また、柔軟性を有するシリカマットで構成された内面被覆部 2 7 で遺骨を包み込むことにより、故人に安らかに眠ってほしいという遺族の故人に対する思いを込めることができる。

【 0 0 5 1 】

(第 4 実施形態)

本実施形態は、図 9 に示すように、納骨袋 2 の構成を変更した例である。なお、第 3 実施形態と同様の構成及び作用効果については説明を省略する。

【 0 0 5 2 】

図 9 に示すように、遺骨収容袋部 2 1 は、遺骨を収容する骨壺 3 を収容可能に構成されている。すなわち、遺骨収容袋部 2 1 は、円筒状の骨壺 3 の形状に対応した形状である。なお、遺骨収容袋部 2 1 の形状は、骨壺 3 の形状に合わせて変更することができる。

【 0 0 5 3 】

本実施形態の納骨袋 2 によれば、例えば地震や火災等が起きて納骨堂が倒壊しても、納骨袋 2 によって衝撃を吸収し、骨壺 3 が割れることを抑制できる。特に、シリカマットにより構成された内面被覆部 2 7 によって、骨壺 3 の割れをより一層抑制できる。また、骨壺 3 が万が一割れたとしても、遺骨を納骨袋 2 に収容した状態で十分に保護することができる。

【 0 0 5 4 】

(その他の実施形態)

本発明は、上記実施形態に何ら限定されるものではなく、本発明を逸脱しない範囲において種々の態様で実施しうることはいうまでもない。

【 0 0 5 5 】

(1) 上記実施形態 1 では、図 3 に示すように、納骨袋 1 の少なくとも一部がお墓 1 0 のカポート 1 0 1 の底に露出した土 1 0 2 に接する状態で、納骨袋 1 を所定の期間納める態様であったが、例えば樹木葬のように、遺骨を収容した納骨袋を土の中に埋葬し、納骨袋全体が土に接する状態で、納骨袋を所定の期間納める態様であってもよい。

【 0 0 5 6 】

(2) 上記実施形態 2 では、図 4、図 5 に示すように、納骨袋 1 の遺骨収容袋部 1 1 の内面 1 4 の一部を被覆する内面被覆部 1 5 がシリカマットにより構成されているが、内面被覆部 1 5 は、例えば従来から納骨袋の材料として用いられている木綿布等で構成されていてもよい。上記実施形態 3 も同様である (図 6、図 7)。

【 0 0 5 7 】

(3) 上記実施形態では、図 8 に示すように、納骨袋 2 を納骨堂のロッカー式の納骨壇 2 0 の納骨棚 2 0 1 に所定の期間納める態様であったが、納骨袋を仏壇式、棚式、墓石式等の各種形式の納骨堂の納骨場所に納める態様であってもよい。

【 0 0 5 8 】

(4) 上記実施形態における 1 つの構成要素が有する機能を複数の構成要素として分散させたり、複数の構成要素が有する機能を 1 つの構成要素に統合したりしてもよい。また、上記実施形態の構成の一部を省略してもよい。また、上記実施形態の構成の少なくとも一部を、他の上記実施形態の構成に対して付加、置換等してもよい。なお、特許請求の範囲に記載の文言から特定される技術思想に含まれるあらゆる態様が本発明の実施形態である。

【 符号の説明 】

【 0 0 5 9 】

1 ... 納骨袋、 1 1 ... 遺骨収容袋部、 1 2 ... 開口部、 1 3 ... 紐部、 1 4 ... 内面、 1 5 ... 内面被覆部、 1 1 1 ... 一方の端部

10

20

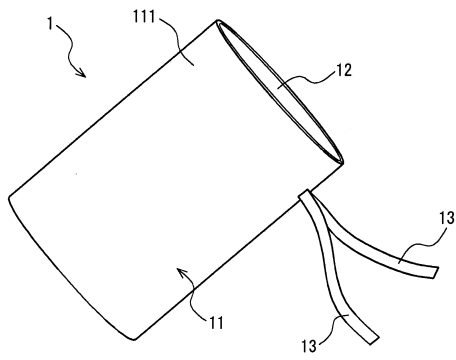
30

40

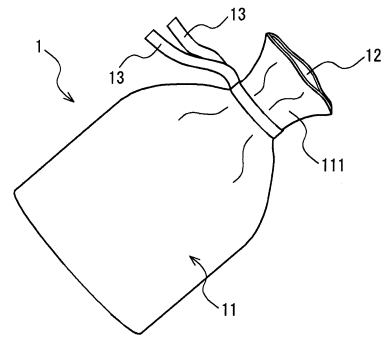
50

【図面】

【図 1】

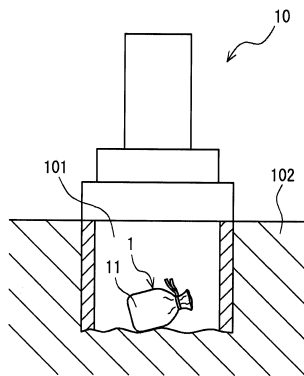


【図 2】

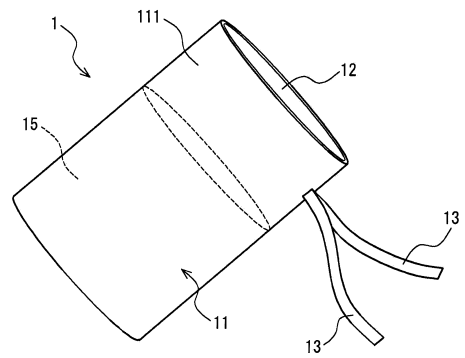


10

【図 3】



【図 4】



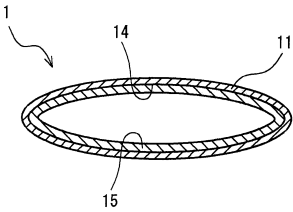
20

30

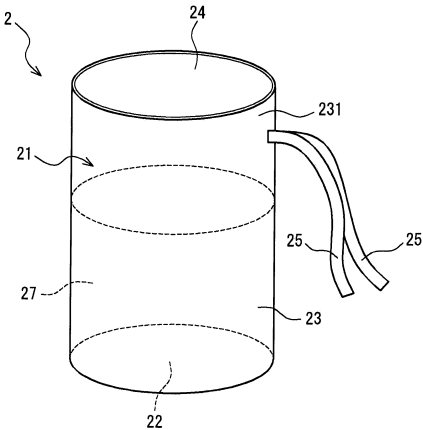
40

50

【図 5】

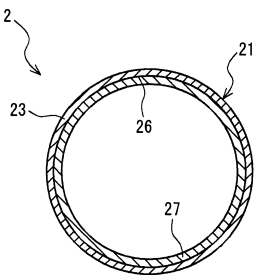


【図 6】

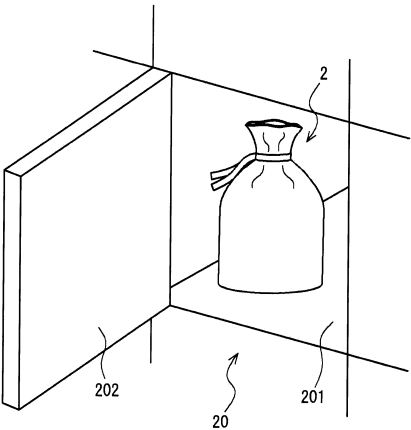


10

【図 7】



【図 8】



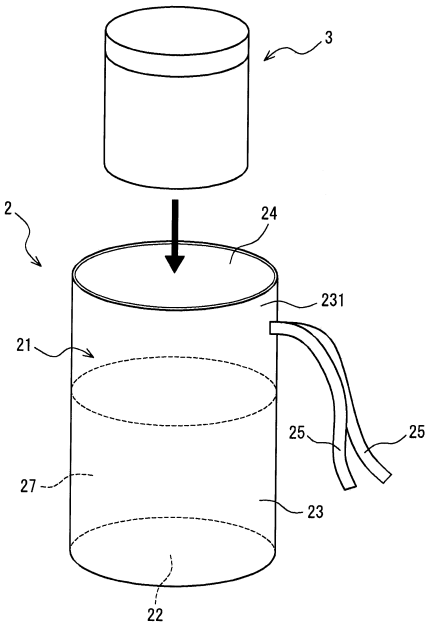
20

30

40

50

【図 9】



10

20

30

40

50

フロントページの続き

- (56)参考文献 実開平 0 3 - 0 7 5 7 3 2 (J P , U)
登録実用新案第 3 1 6 6 4 0 3 (J P , U)
特開 2 0 0 2 - 0 0 0 6 7 7 (J P , A)
- (58)調査した分野 (Int.Cl. , D B 名)
A 6 1 G 1 7 / 0 8